

コロナが収束しそうな？ 夜のこと

加藤 誓 (ちかい)

名古屋市内のコロナの「新たな感染者数」がゼロになったとニュースでいていた。

その夜、元の会社仲間の麻雀大会が藤が丘の雀荘で始まった。私の組はいつものメンバーの4名が揃っている。もう一つの組が2名だけで揃わない。「あと2名誰でもいいから早くこないかなあ。」すると、私の学生時代の仲間の2名が、「ごめん、ごめん。新幹線が間引き運転で、遅れてしまい申し訳ない。」と汗を拭きながらマスク顔で現れた。東京から飛んできたのだ。「揃ったから、さあ、始めるか。」「おばちゃん、生ビール大ひとつ。「俺も！」雀荘のおばちゃんは大勢のビール運びで大忙しであるがうれしそうである。向こうの方で、手を振っている人がいた。同じ町内の麻雀仲間である。「久しぶり！元気だった。」「今日は久しぶりに、たらふく酒を飲むぞ！」



「おやじ、焼き鳥。砂肝に皮、ハツとなんこつ。それから、レバーも頼むわ！」会社の仲間と町内の仲間が飲むは！食べるは！しゃべるは！何時の間にか雀荘が「焼き鳥の店」になっていた。

そして、皆、マスクはしていない。焼き鳥屋は大繁盛で大将は冗談をいいながらも、手だけは、次から次と焼き鳥の串をひっくり返して焼いている。「おかあちゃん、焼酎おかわり。」「俺は、ハイボール、いやロックにしようかな。」「ウィスキーのつまみは、やっぱりブルーチーズが、いいなあ。」「ま〜、加藤さん、いらっしゃい。久しぶり。店もコロナで一年間の休みで大変だったのよ。」「ボトル、ちゃんと、そのまま保管しておいたから、今日は全部飲んでいってね。」

店にいた、いつものメンバーに「よかったら飲んでください。」とふるまい酒。自分もロックで飲み、ボトルが空になった。だが、どうしたわけか一向に酔わない。ママが「カラオケも一年ぶりで、マイクのほこり、さっき綺麗にしたから、たくさん歌ってね。」「何を歌う！」何時の間にか、焼き鳥屋がスナックになっていた。



「宗右衛門町ブルースがいいね。」なぜかいつも出る高い音が出ない。ママが助け舟とばかり一緒に歌ってくれた。お陰で92点の高得点が出た。

「次の曲は、美しき天然をお願いします！」「♪空にさえずる鳥の声〜・・・♪」
「ああ、ちんどん屋の曲ね。」

ちょんまげのかつらをかぶり、着物姿でサックスを吹きながら私は踊り始めた。何時の間にか大須商店街になっていた。大勢のひとがチンドン屋の私をみて笑っていた。



向こうから、私の主治医である糖尿病専門医が白衣を着て、看護師ふたりを連れて現れた。「加藤君、酒は飲んでないでしょうね。」「先月の外来で酒は飲みませんと約束したでしょう。」看護師のひとりが、「私、しっかり見ていたわよ！」と目を吊り上げて 叫んだ！

びっくりして、布団をはねのけ、目が覚めた。 楽しい夢だった。